

新しい企画展「切り絵で伝える物語」のご案内

市町村合併により新しい浜松市が誕生して7年余。今、「一つの浜松による一体感のあるまちづくり」の実現に向けた取り組みが随所で行われています。浜松文芸館でも文芸館のもつ役割を踏まえつつ、広域化した浜松の一端を市民の皆様に紹介し、一体感を深めていただく事業を開催したいと考えました。

そこで今回は細江町、引佐町を中心に、そこに伝わる物語や伝統芸能を切り絵で表現した作品を紹介し、観覧した方々に、当地を身近に感じていただく場を設けました。

併せて、切り絵という親しみやすい表現を通して、地元の民話や芸能が、次世代の子どもたちに伝わる機会となることを期待しております。

期間を前・後期に分け、前期は「姫街道物語」、後期は「三遠南信の切り絵 遠江のひよんどりとおくない」をテーマに開催します。

【期間】前期：平成24年11月17日～12月24日

後期：平成25年1月4日～2月24日

【協力】いにしへの町づくりの会・川名ひよんどり伝承教室

ぜひ、お楽しみください。



文芸館の四季



駐車場でひとときわ高く空に向かって伸びているイチョウの葉が、見る見る黄色に変わってきました。今年は台風による塩害の為か、上の方が疎らなのが少々残念ですが、それでも周りの常緑樹を押し退け、澄んだ秋の光を浴びて輝きを放っています。

また、館の南側のカエデも、まだ緑の葉は残るものの大分色づいてきました。2階のベランダに出ると、このカエデを上から眺めることができます。紅葉を上から愛でることができるのも文芸館ならではの一興です。

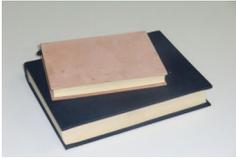
それにしても、今年の秋が殊更短く感じられるのは私だけでしょうか。ここに来て暑から寒への急激な変化に、木々も気持ちの準備が整わないまま、せかされて色を変えているように感じられます。

思えば今年の春も然り。遠くない将来、この項のタイトルを「文芸館の二期」に変えなくてはならない日が来るのではないかなど思ってしまう。

ある折俳句の先生から、今年は「夏夏秋冬冬ですね」の一言有り。その的を射ている造語に、思わず驚嘆してしまいました。

お知らせ

○開催中の企画展に併せて、『歴史散策 切り絵で伝える「姫街道の町」』の冊子（見本は展示室にあり）を販売しています。ご希望の方は事務室まで申し出てください。



浜松文学紀行 14

阿仏尼歌碑 湖西市吉美

室町時代の明応から永正にかけての大地震や風水害などによって今切^{いまぎれ}ができるまで、新居と舞阪は陸続きだった。

「吾妻鏡」によれば建久元年(1190)、源頼朝が上洛の途次橋本駅に宿泊している。橋本駅は浜名川のほとりにあり、川には橋がかかっていた。

鎌倉後期の女流歌人阿仏尼の「十六夜日記」には、「浜名の橋よりみわたせば、かもめといふとり、いとおほくとびちがひて、水の底へもゐる。いはのうへにもゐたり」と書かれている。

橋からの眺めは天下の絶景で、古来歌枕として知られていた。

澄みわたる光もきよし白妙のはまなのはしの秋の夜の月

藤原光俊(勅撰和歌集)

ほか、多くの旅人によって詠まれている。

阿仏尼は貞応元年(1222)頃の生まれ、60歳位で没した。朝廷に仕えていた頃初恋をしたが失恋、出奔して一時義父のいる浜松に身を寄せた。手記「うたたねの記」に、「波あらきしほの海路のどかなる水うみのおちいたるはじめにはるばると生つづき松のこだちなど絵にかかまほしくぞみゆる」と浜名湖の情景を叙している。

30歳頃、藤原定家の次男で「続後撰和歌集」などを編んだ歌人藤原為家の側室となり、為相^{すけ}ら3子を産んだ。為家の没後、播磨^{はりま}国細川荘の相続をめぐり正妻の子為氏と争い、弘安2年(1279)幕府に訴えるため鎌倉へ下った。「十六夜日記」は、この時の紀行と鎌倉滞在時のことを記したものである。

現在、新居関跡を右に見て旧新居宿を西へ向かうと「疋田弥五郎本陣跡」の標石がある。左折して更に進むと「橋本西信号」に行き当たる。旧東海道は信号の右斜めの道で、「浜名旧街道」とも呼ばれた。紅葉寺跡の入口へ来るとその先にみごとな松並木が続いている。その松並木の途中に阿仏尼と夫藤原為家の歌を刻んだ自然石の歌碑が立っている。

風わたる浜名の橋の夕しほにさされてのぼるあまの釣舟

前大納言為家

わがためや浪もたかしの浜ならん袖の湊の浪はやすまで

阿仏尼

阿仏尼の歌は「十六夜日記」中の歌で、「たかしの山もこえつ。海みゆるほど、いとおもしろし。浦風あれて、松のひゞきすごく、浪いとたかし」のあとに詠まれている。

「私が来たためだろうか、高師の浜の浪が高くたつのは。私の袖の涙の浪は休むことなく押し寄せているよ」の意味であろう。「高師」と「高し」を掛けている。為家の歌は、自らが選んだ「続古今和歌集」に収められている。

「十六夜日記」には、天竜川、小夜の中山、菊川、大井川、宇津の山、手越、清見ヶ関、富士川、三島などが登場するが、小夜の中山の道脇に、「雲かかるさや中山越えぬとは都に告げよ有明の月」の小歌碑が立っている。(中山を詠んだ三首中の一首である。)

浜松文芸館「文学散歩」講師 和久田雅之